

北海道 サルモネラ対策スケジュール

平成21年5月中旬より、食欲低下、40℃前後の発熱軟便が乳用成牛で散見。下旬に哺乳子牛で血便が認められた。当該子牛及び成牛からSalmonella newportが検出された。

	使用抗生物質	使用生菌剤	消毒液
6月1日、2日病鑑にてサルモネラ検出(成牛4頭、黒子牛1頭)		生菌剤A (3日間)	塩素系消毒液
6月3日 全頭一斉検査		生菌剤B	
6月9日～13日まで牛群一斉抗生物質投与	抗生剤A(3日間) 抗生剤B(5日間)	↓	
6月16日 全頭一斉検査		↓	
6月19日～23日 保菌牛に抗生物質投与	抗生剤C(3日間) 抗生剤B(5日間)	↓	
6月26日より生乳出荷再開		↓	
6月29日 全頭一斉検査および環境検査		↓	
7月3日飼料関連環境検査にてすべて陰性		↓	
7月7日 飼料メニュー変更		↓	
7月8日～10日まで抗生物質投与	抗生剤D(3日間) 抗生剤B(5日間)	↓	
7月13日～15日まで抗生物質投与	抗生剤E(3日間) 抗生剤B(5日間)	↓	
7月18日 ルーメンバックプラス投与開始(搾乳牛のみ)		ルーメンバックP 50g/頭	
7月21日 全頭一斉検査この結果を受け抗生物質投与の中止を決める		↓	
7月29日 陽性牛3頭自主淘汰(成乳牛)		↓	
7月30日 消毒		↓	
7月31日 環境検査(牛舎内換気他)および牛舎内一斉清掃消毒		↓	
8月3日 個体、環境一斉検査		↓	
8月17日 個体、環境一斉検査		↓	
9月3日 個体、環境一斉検査 飼料メニュー変更		↓	
9月16日 個体、環境一斉検査 清浄化		↓	
9月21日 飼料メニュー変更		↓	↓
11月中旬 ルーメンバックプラス投与終了		↓	

検査結果

検査日	6月3日	6月16日	6月29日	7月18日	7月21日	8月3日	8月17日	8月31日	9月14日	11月中旬
個体陽性(直接および間接)乳牛	24	3	18	ルーメンバックプラス投与開始	10	1	1	0	0	ルーメンバックプラス投与終了
個体陽性(直接および間接)和牛	0	0	0		0	0	0	0	0	
個体陽性(直接および間接)乳用子牛	1	0	0		0	0	0	0	0	
個体陽性(直接および間接)和牛子牛	3	1	0		0	0	0	0	0	
個体陽性総頭数	28	4	18		10	1	1	0	0	
乳用牛	35	35	35		35	31	31	31	31	
黒毛和牛	17	17	17		17	11	11	11	11	
乳用子牛	8	9	8		9	11	12	12	10	
黒毛子牛	5	5	8		8	13	15	12	9	
総飼養頭数	65	66	68		69	66	69	66	61	
陽性割合	43.1	6.1	26.5	14.5	1.5	1.4	0	0		
環境陽性	19	2	6	3	0	0	0	0		
検査総数	25	25	25	25	25	25	25	25		
	76.0	8.0	24.0	12.0	0	0	0	0		

今回、一般的な対策として1ヶ月半抗生剤、生菌剤等を用いて対策しましたが、効果のほどに疑問を抱き**抗生剤中止とともに粗飼料主体の飼料メニューに変更しました** その対策として、**消毒とルーメンバックプラスの投与のみとした。**

夏場の暑熱期と重なり不安であったが、ルーメン発酵の正常化が良好に言ったと思われる。その中で感觸としてルーメンバックプラスの貢献度は非常に高いと感じられた(抽象的ですが、乾物摂取量の落ちる夏場で粗飼料摂取は計算よりも落ちると思われたが…)

ルーメン発酵に寄与する役割からルーメンバック投与を続けてほしいと思ったのですが畜主さんが高価なものと感じており11月中旬で中止した。**おそらくマイナーサルモネラ菌は、抗生剤に頼るよりもはじめにルーメン発酵を正常化して消化管内でサルモネラを減少、死滅させることが近道かと考えられる。**

今後同様の発生が認められた場合には、飼料給与メニューの見直しとともにルーメンバックプラスを活用した抗生剤に頼らない対策を第一にしていきたいと思わせる事例でした。(特に生乳廃棄が生産者に及ぼす影響を考慮すると…)